金閣炎上

水上　勉

新潮社版

装画・牧　進
口絵・外箱写真・宮寺昭男

© Tsutomu Minakami
Printed in Japan 1980

雁の寺（全）・金閣炎上
〈新潮現代文学45〉
昭和五十五年七月十日 印刷
昭和五十五年七月十五日 発行

定価一二〇〇円

著者 水上勉
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町七一
業務部・(〇三)二六六一五一一一
編集部・(〇三)二六六一五四一一
振替 東京 四一八〇八
印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 新宿加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

雁の寺（全）　5
金閣炎上　185
解説　木村光一　389
年譜　398

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

雁の寺（全）・金閣炎上

雁の寺（全）

第一部　雁の寺

一

鳥獣の画を描いて、京都画壇に名をはせた岸本南嶽が、丸太町東洞院の角にあった黒板塀にかこまれた平べったい屋敷の奥の部屋で死んだのは昭和八年の秋である。

老齢に加うるに持病のぜんそくがひどかったせいもあって、蟷螂のように痩せた南嶽の晩年は意志だけが生きのこっているように思えた。死なはる時はまるで虫喰いの枯木が倒れたようどした、と居合わせた弟子たちが口ぐちにいったほどだから、精力家としても知られ、女あそびも人一倍だった生前を知っているものにとっては、殊更、南嶽の死際がそのように思われたのかも知れない。彼は一昼夜、大いびきをかいて寝ていたが、最後は、やはり咽喉をならし、苦しみもがいて死んだ。南嶽は六十八であった。

岸本南嶽が死んだ日の前日、正確にいうと十月十九日のことであった。夫人の秀子がちょっと外へ出た留守に、見舞かたがた立ち寄ったといって、衣笠山麓にある孤峯庵の住職、北見慈海が訪ねてきた。和尚は首に白絹布の護襟をまき、黒の被布をきて、どこかの回向の帰りとみえ、裾から紫衣の襞をのぞかせていた。

「どうや、どんなあんばいや」

慈海和尚は、玄関に出た顔見知りの女中にそんな言葉をあびせながら、つかつかと入ってきた。と、そのとき、うしろに、まだ十二、三歳としか思えない背のひくい小坊主が立っていた。この小坊主も和尚の後ろを上ってくる。

岸本家は、孤峯庵の檀家であった。名誉総代にもなっていたから、和尚がこうして奥の間にさっさと通っても不思議ではないのだが、折から、枕元に坐っていた弟子たちの中で、病人の口もとを水綿でしめらせていた兄弟子の笹井南窓が、ちょっと気に病んだ。縁起でもないと思ったのである。師匠はいま虫の息で医者からも見放されている。そこへ、菩提寺の和尚の来訪だった。南窓は、皆にしぶい顔

をしてみせた。女中が、茶菓をとりに廊下へ下ってゆくと、弟子たちの顔色をまるで無視するように、慈海は風をたてて枕元に歩みよって、臥ている南嶽の顔をさしのぞき、

「どうや、どんなあんばいや」

とまたいった。その声はたかかったので、ひくい天井にはねかえって、襟もとまですっぽり絹蒲団をかぶって朽木のようにねていた南嶽の耳を打った。南嶽はとじていた瞼をうっすら半びらきにあけると、

「和尚さんか」

と、苦しそうな声をだした。

これは、わきにいた弟子たちを驚かせた。朝から南窓がいくら師匠の名をよんでも南嶽はだまっていた。それなのに、いま乾いた口をわずかにひらいて南嶽はかすれ声でいったのだ。

「来てくれると思うとった」

「いやな役目やな」

和尚は、ずんぐりした肩を落して南嶽の顔をさしのぞいてから、横柄な物言いでいった。

「わしは、あんただけは迎えにきとうなかった」

そういうと、広い十畳間に南窓と三人の弟子が坐っているのを、はじめてみるような眼つきで見廻して、不意にケラケラ笑いだした。笑い終ると、先程から縁先に立って、じっと庭の色づいた蔦のからみついている石燈籠に見入っていた小坊主をよんだ。

「おいおい、慈念」

小坊主は、びくっと肩をうごかした。首だけこっちへ廻して部屋をみている。剃っているので、頭の鉢の大きなのがへんに目立つ子である。額が前へとび出ている。ひどい奥眼なので顔がせまくみえる。

「こっちへおいで」

慈海和尚は手招きした。小坊主は畳のへりをよけて静かに歩きだした。擦るような歩き方である。

「慈念いうてね。昨日、得度式がすんだ。庭もきれいに掃除してくれる。ようなったら、いっぺん寺へあそびにきてもらわねばならんの」

立ち寄った理由は、これであったか、侍者を育てることになったあいさつのようなものだったか。南窓はつるつるに剃った大きな頭の小坊主の横顔をじいっとみつめていた。ずいぶん陰気な小僧を入れたものだなと思った。禅寺で小僧が得度式をあげた場合、これを檀家総代に披露目するのがしきたりだったのである。

和尚はやがて枕もとから踵をかえして縁の方に歩きだした。と、このとき、南嶽がまたかすれ声をだしていった。

「和尚さん、さとを頼んますよ。あれは、孤峯さんの娘

や」

そういったかと思うと、瞼を閉じた。声をだしたのがわるかったとみえて、南嶽ははげしく咳き込みはじめた。南窓がにじりよって、湿綿を口に何どもあてた。

和尚は、その有様をふりかえってみていた。大きく会釈しながら見下ろしていたが、そのとき南嶽の顔はもはや草色であった。

「大事にな」

いい置いて、ほんの四、五分間のやりとりであった。慈海は得度式がすんだばかりの小坊主の頭を一つ撫でると、小股歩きにせかせかと岸本家を退去していった。

翌日まで、南嶽はひと言も口をひらかなかった。大いびきをかいて苦しそうに咽喉をならしていたかと思うと、それが急にとまって息をしなかったりした。息をひきとるときは、口をかすかにあけた。何かいったようなので、弟子たちはのぞきこんで耳をかたむけたが、「さと」ときこえたようであった。

弟子たちは枕元の夫人秀子の方をみた。秀子は袂を顔に押しあてて、むせび泣きはじめていた。きこえないらしかった。

南嶽が死ぬ間際にたのんだ、さとというのは桐原里子のことで、南嶽が上京区の出町の花屋の二階に囲っていた女である。木屋町の小料理屋につとめていたのを、南嶽がひっこぬいて晩年入りびたりになった相手であるが、この女のことは弟子たちも、慈海和尚もよく知っていた。三十二だが、小柄で、ぽちゃっとしており、胴のくびれた男好きのするタイプで、かなり美貌であった。なぜ、南嶽がこの里子のことを慈海に頼んだか。考えてみると理由がないとはいえない。

健康であったころの岸本南嶽は、遠くは中国にも、欧州にも旅をしたけれど、念の入った大作となると、いつも孤峯庵の書院を借りて仕事をする習慣だった。衣笠山周辺から落葉樹林のある寺のあたりが好きだったらしく、ここが、晩年のアトリエになっていた。十年ほど前のことだが、南嶽はひと夏じゅう仕事もしないで孤峯庵の書院で暮らしたことがある。そのとき、つれてきていたのが里子であった。

「これはな、わしの描いた雁や」

里子をつれて、孤峯庵の庫裡の杉戸から本堂に至る廊下、それから、下間、内陣、上間と、四枚襖のどれにも描かれてある雁の絵をみせて歩いた。

襖は金粉がちりばめてあった。根元の大きな古松が、池に匐うように大きく枝をはっていた。針のような葉が一本一本克明に描かれていた。雁のむれは、その下枝にとまったり、羽ばたいたりして宿っていた。とび立ちかけて白い

腹を夕空に輝かせている一羽もいるかと思えば、松の幹の瘤の一部のように動かずにすくんでいる一羽もいた。子の雁もいた。口をあけて餌を母親からもらっている雁もいた。それらの幾羽とも知れない雁は、墨一色で描かれていたが、一羽とて同じ雁ではなかった。画家が情熱をこめて、一羽一羽に念を入れて描いていった筆の音がきこえるようであった。雁は生きているかにみえた。

これは南嶽がその年のまだ二年ほど前の春、精根かたむけて描いたものであった。本人が自慢しても、はばからないほど卓れた絵である。

「わしが死んだら、ここは雁の寺や、洛西に一つ名所がふえる」

酒気をおびていたので南嶽は、里子の首すじに手をやりながら微笑していった。

「啼き声がきこえるようやわね」

と、里子は本堂のうす暗い光りの中で恍惚とつぶやいた。南嶽は微笑しながら、そんな里子の首すじをいつまでも弄んでいた。

死んだ南嶽が、慈海和尚に里子を託したのは、この夏のことが忘れられなかったからであろうか。

事実、よく書院で三人は酒を呑んだものである。慈海は南嶽より十歳も若かったが、南嶽に似て精悍な軀と顔をしていた。里子とも性が合った。

「和尚さん、耳の穴の毛ェだけはぬいとくれやすな」

里子が酔いのまわった眼をほそめてそういうと、慈海は笑って二人をみつめている。その眼には好色な光りが宿っていた。慈海には妻はなかった。よく里子は南嶽に、

「和尚さんの眼ェがこわい」

といった。慈海が自分を好いていることを知っていたのだ。

慈海も南嶽も、好みが一致していた。女も酒もすべて話が合った。南嶽はいつまでも慈海が妻帯しないことに不満らしかった。孤峯庵は燈全寺派の別格地だといっても、本山塔頭の寺院でさえ、すでに匿女は大びらであった。庫裡の奥に、どの寺も女をかくしていた。好色でもある和尚が独身を守る理由がないと面とむかって南嶽はいったものだ。しかし、慈海はへらへら笑って相手にしない。しつっこく南嶽がいうと和尚はこういった。

「髪を断ずるは愛根を断ずるなり、禅家の剃髪の趣意じゃがの」

初七日がきたとき、桐原里子は喪服を着て、細い白い腕に褐色の瑪瑙の数珠をはめて孤峯庵の門をくぐった。この日は曇り空で、風があった。小松の茂った衣笠山は、盆を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

伏せたように煙っていた。なだらかな裾一円は、すっかり葉の疎らになった落葉樹林にかわっていたが、山の赤い地肌のすけてみえるあたりに、紅葉した楓がいくつもはさまれて映えている。

孤峯庵には、山門のわきに鉄鎖のついた耳門があった。里子が草履の音をさせて入ってくると、この鉄鎖はキリキリと音をたててあたりの静寂を破った。応対に出たのは、里子には初対面の慈念である。鉢頭の大きな、眼のひっこんだ小坊主は、少し長目の青無地の袷をきて板の間に膝をついていた。それが庫裡の煤けた柱を背にしていやに大人っぽくみえる。里子はちょっと途惑った。

「出町がきたと和尚さんにいうとくれやす」

里子は、上りはなの踏石に立って、そういった。

「はい」

慈念はすぐ隠寮の方に下ったが、まもなく、奥から廊下を歩く早足の音がして、白衣の袷に角帯をしめた慈海が出てきた。

「あがんなはれ、あがんなはれ」

里子は、なつかしそうに和尚をみた。むっちりとした里子の軀はいつものとおりしゃきしゃきしていたが、顔だけは思いなしか心もち蒼く澄んでみえた。そんな里子をみて、慈海和尚は喜悦の声をあげた。和尚は里子を書院に通した。そこは、里子にも思い出の部屋であった。南嶽の葬式は、すでにここですんでいた。築山と池のみえる静かな部屋である。里子は掌を畳について瞼をうるませていった。

「和尚さん、お久しぶりどす」

里子は、南嶽の葬式に列席するわけにはゆかなかった。出町の花屋の二階でその死を知り、葬式の日取りも知ったが、一人で故人を偲んでいたという意味のことを語った。

「早よおまいりしたい。和尚さん、あの人の雁の絵をみせとくれやす」

里子はあまえるようにいい足した。

本堂に案内され、やがて里子は打敷のかかった戒壇の上に、まだ新仏の位牌が特別に飾られてあるのを見て息をつめていた。

秀嶽院南燈一見居士

慈海がつくった院号の戒名であった。岸本南嶽はいま、一尺たらずの短冊型の板にその軀をちぢこめて立っていた。

里子は香を焚いた。十畳ほどの内陣は香煙で白くなり、煙が畳の上にたゆたいはじめると、南嶽の描いた襖の雁が、霧の中で動きはじめるように思われた。美しい雁であった。里子はふと、南嶽が成仏しただろうと思った。

下間の襖の中央部に、白い腹毛をふくらませた二羽の雁が目についた。その一羽は松の窪みにちぢこまって一羽の

雁の脇下を嘴でくすぐっていた。里子はいつまでもその襖絵をみていた。と、このとき、慈海がうしろからいった。
「さ、あっちへゆこ、いっぱい薬酒をさしあげよう」
慈海はうきうきしていた。里子は隠寮の六畳にはじめて通った。そこは慈海の部屋であった。膝をついて、座蒲団を出してくれる小坊主を顎でしゃくった慈海は、里子にいった。
「これがの、わしの女房がわりや、慈念いうてのう、ついこのあいだ得度したばかりじゃがの」
慈念はぺこんと頭を下げ、ひっこんだ奥眼をきらりと光らせて、里子をみていた。やがて、はにかんだように、さっと顔を伏せ、足早に去っていった。
「玄関ではじめてみたとき、びっくりしたわ。妙な子供さんや思うて……いくつ？」
「十三や」
「へーえ、学校は？」
「大徳寺の中学校へいっとる」
「和尚さんの跡取り？」
慈海は、里子の顔をみただけで返事をしなかった。うしろの仏壇の下の小襖をあけに立った。一升瓶の酒が幾本もみえる。その中から沢之鶴を出して、
「今日はこれをあけよ」
そういうと、慈海は子供のように頬をほころばせて手をたたいた。慈念が顔を出した。
「熱燗でもってきてくれんか」
慈念は瓶をかかえて廊下に消えた。顔に似合わず小まめに働く子供だと里子は思った。膳の用意をして、徳利と盃を運んでくる。里子ははじめ、慈念の顔をみたとき、変になじめないものを感じた。しかし、見馴れてくると、頭の大きなこの子がいじらしくさえなってくるのは妙だった。
「えろう働かはる子や、ええ小僧さんもちなはった」
酔ってくると里子は慈海にいった。
里子は久しぶりに呑んだ。ひどく廻りが早かった。夜になった。よく南嶽も入れて、三人で呑みあかしたこともあるから、里子は落ちつけた。
「わしは南嶽からたのまれたぞ」
慈海がそういったとき、里子は黒眼の大きな慈海の瞳にキラリと光りが宿るのをみた。
「あんたの面倒をみてくれといいよった。あの男は、わしがあんたを好きなことをよう知っとった。あんたはきてくれるかの」
慈海は白衣の袷の膝をはだけて寄ってきた。じっと返事をまっているようだった。里子はだまっていた。だまっていることがかえって慈海に手だてをあたえる時間をつくっ

た。座蒲団をうしろへ蹴った慈海はうしろから羽交いじめにして唇を吸いにきた。里子はこんな日のあることは予期していたと瞬間思った。抵抗はしなかった。和尚の精悍な軀がやがて裾を分けて入ってきた。里子は細眼をあけ、その視線のあたった下手の障子にふと何かが動く影をみた。里子ははっとして和尚を押しのけた。

慈念のように思われた。しかし、それは何でもない影のようでもあった。里子はすぐ意識が遠のき、和尚に力強く軀を吸われた。

「きてくれるかの」

慈海はあえぎながら何どもいった。顔を畳にすらせ、乱れ髪のまま里子は幾度も首を振っていたが、やがてそれも億劫になった。

桐原里子が、孤峯庵の庫裡に住むようになったのはこの翌日からである。ありていにいえば、里子はこのまま帰らなかったのだ。南嶽の初七日が、里子の入山式になっている。

桐原里子が、孤峯庵の内妻に入った理由を分析してみると、まず経済的な事情が作用している。南嶽が死んだあと、里子は自活の道を考えねばならなかった。里子は岸本家から茶掛一本ももらっていない。夫人はそのような思いやりを示す女でもなかった。もちろん手切金もなかった。もらえなくてもまた、当然のことであった。死んでわかったことだが、南嶽は相当の借金を残していた。無頼な生活をしただけに予想もせぬところから債務が出てきて、夫人は丸太町の家だけ残したのが精一杯であった。里子はつとめに出ようと思ったが、三十をすぎたその年では料理屋の仲居ぐらいしか口がない。三十すぎて、これから昔の苦労をするかと思うと億劫だったし、イヤでもあった。もとの古巣にもどるのも、同僚に笑われる気がした。

だから里子にとって、孤峯庵は決してわるい場所ではなかった。本山燈全寺派の別格地でもあるし、寺には檀家も多かった。慈海の妻になれば、まず喰うに困るということはないだろう。それに酒好きの慈海の相手をしておればすむことである。長いつきあいから慈海の性格はよく知っている。

また、里子は、孤峯庵は京都のどの寺よりも好きであった。衣笠山のなだらかなたたずまいを起き伏しに見てすごせるのも魅力であったし、甘柿や、ぐみや、枇杷に囲まれた寺の庭も好きでならなかった。

それに、本堂には南嶽の描いた雁の絵がある。

十年間――南嶽といっしょにくらした里子は、孤峯庵にも南嶽と同じ愛着があったようだ。今から思うと、雁を描いて慈海から一文も取らなかった南嶽は、死後をここに委

ねるつもりでいたのだろうか。南嶽がそうであるならば、里子もまたこの寺が最後の家である気がした。

慈海は禅坊主らしからぬ俗気のみえる顔立ちをしていたし、稚気のある笑い顔をするのも里子の好くところである。

「南嶽にたのまれてのう」

慈海が、そういって寄ってきたとき、里子は、つきあげてくる嬉しさとかなしみが混って膝を固くした。しかし、慈海に軀をゆるそうとした瞬間、障子にうつった影は何だったろう。里子はふとおびやかされている自分を知った。慈念であったかも知れない。鉢頭の大きな小坊主の影はすぐ障子の向うに去り、里子の酔った脳裡からは消えた。固い畳に押しつけられ、里子は若者のような慈海の力の下で、背中を吹きぬけてゆく風の音をきいていた。このときみた影が何であったか。わかったのは年数がたってからのことである。

二

孤峯庵の裏の竹藪から、衣笠山の裾にさしかかる疎林の中に、一本の椎の木があった。この椎には葉も枝もなかった。まるで黒い巨大な棒が空に向ってつき出ている風にみえた。根もとは二抱えもありそうな太さである。

いつやらほどから、この椎の木の天辺に一羽の鳶がとまるようになった。木の先はまるでぶち切ったように丸く折れているので、とまった鳶は白い空を背景にして剝製の置物のようにみえた。

しかし、この鳶は、ときどき、孤峯庵の庫裡と本堂の上を旋回していた。円を描いてゆるやかに飛翔するのである。ときどき、庫裡の屋根瓦の端にある鬼瓦にとまって、白砂利を敷いた庭先をへいげいしていた。そんなとき鳶の眼は四囲にむかってキラキラ動いた。

「ああ、こわ、和尚さん、とんびんがまた椎の木にとまってる」

里子は隠寮の奥の廊下の端から爪さきだって叫んだ。

「池の鯉をねらっとる。けしからん奴ちゃ」

と慈海はいった。里子ははれ瞼の眼を見ひらいて和尚の方をみた。

「人の眼をぬすんでな、鯉が水の上に顔をもたげると、さっと下りてきよるんじゃ」

「大きな鯉をとんびんが獲らはる。そんなん、どうしてはこばはるの」

「鳶は、かしこいでの、くちばしでつついて、足ではさんでもちあげよる。空にあげて落しよる。鯉が地に落ちて死ぬ。そいつを巣にもって帰る。えらい奴ちゃ」

「いややな、池に網張ったらええに」

里子は子供のようにいったが、慈海は馬鹿なことをいえ、といった顔をして部屋に入りこんだ。

里子は退屈であった。何もすることがなかったのである。慈海は、檀家廻りや、本山出頭など、毎日ほど用事に追われていたが、里子は一日じゅう庫裡の奥のこの隠寮の奥にじっとしていねばならない。はじめは、寺の生活が珍しく、煤けた庫裡の台所や、副司寮、納戸など、伽藍の隅々を見て目新しく思ったものだが、それも馴れてくると、床のたかい寺院の雰囲気は、やはり、花屋の二階の六畳とはちがって、寒々とした感じがした。

里子の部屋は慈海の部屋の奥にある六畳で、南に障子が四枚あるきりだった。三方が壁になっていた。里子はその部屋のまん中にヤグラ炬燵を置き、出町から運んできた絹布の紅い花柄の蒲団をかけて、足をつっこんでいた。

慈海は、暇があると、里子のわきに足を入れた。慈海の性欲は、南嶽とは比べものにならなかった。それは、慈海が雲水時代から独身を通してきて、今日までためてきたものを噴出しているように里子には思われた。事実、慈海は、朝も昼も里子に求めたのである。里子はべつにその慈海に嫌悪は抱かなかった。南嶽はどちらかというと、里子のくびれた胴のあたりや、臀のあたりを撫でたり、眺めたりして楽しんでいるような夜が多かった。慈海のように実行動を楽しむといったことは少なかった。南嶽に不満であったことが、慈海を知ってから里子にもわかるようであった。里子は寺にきて女になった。

慈海とのあいだは、喧嘩一つすることもなく過ぎていったが、里子になじめないのは、小僧の慈念であったかも知れない。

正直いって、里子はなぜか慈念を好かなかった。だいいち、この少年は、頭が大きく、軀が小さく、片輪のようにいびつに見えたからである。気性はそうでもなく、素朴なところがあって、いうことも素直にきく子だったが、見た目の暗い陰気さは里子にはたまらなかった。

「和尚さん、あの子、どこで見つけて来やはりましてん」

里子は和尚と寝ていてたずねたことがあった。

「あれか」

と慈海はいった。

「若狭の寺大工の子での、本山の普請で話を耳にしてたのんでみたのじゃが、若狭本郷の西安寺の和尚がつれてきよった。成績のええ子じゃいうのでたのんでみたのじゃが、頭はええ。大きな脳味噌をしとる……」

なるほど、あのとび出た額から、うしろにつき出ている後頭部までが脳であったら、脳味噌も重たくてきっと頭も

いいであろう、と里子は思った。
「中学は成績はええのんどすか」
「一等賞をもらいよった。たのしみな子や。田舎でもな、酒井藩の藩主から、奨学金をもろたというて賞状をもってきておったが、小学でも一等賞ばかりもろとる。小賢しい子で往生しとる寺は本山の塔頭でもうんとあるでな。あんなのは大物になる。かわいがってや」
慈海はそういうと、いびきをかいて眠りだした。性欲をはき出してしまうと、いびきをかいて一時間ばかり寝るのが慈海の習慣になっていた。
若狭の寺大工の子供が、十歳のとき、母親からはなれてこの寺に小僧にきているのであった。寺大工の家庭の事情は里子にはわからないにしても、よくも、まあ、小さい子をこのような寺へ出したものだと考えざるを得ない。そういえば、慈念のひっこんだ奥眼のどこかに、かなしみに充ちた光りがあふれている日がなかったかと里子は思いかえしてみる。自分なら、子供を外には出すまい。里子はそう思うのだ。
実際、慈念は、孤峯庵では孤独であった。庫裡の玄関横の三畳の板の間が慈念の部屋になっていて、板の間の奥に一畳だけ畳が敷いてあったが、そこで慈念は柳行李を一つ足もとに置いて、黒い木綿地の蒲団を敷いて寝ていた。三畳の窓は慈念には背の届かないほど高い格子の一方窓で、陽は一日に三時間ほどしかささない。本堂の屋根の端にさえぎられて折角の東向き窓が暗いのであった。格子縞になって入ってくる光りの中で、慈念は、日課の観音経を写している。
慈念の日課は、朝五時起床。洗顔。勤行。飯炊き。それがすむと、庫裡の台所に莫蓙を敷いて朝食。八時半に寺を出て、山道から鞍馬口に出る。千本通りを通り、北大路の大徳寺の西隣りにある紫野中学に通う。この中学はもと禅林各派が徒弟養成のために経営した「般若林」が学令によって中学になったもので、学校教練もあった。制服にゲートルを巻いて登校しなければならなかった。しかし、前身が般若林であるから、学校の課程も寺務に多忙な小僧たちのために考えられていて、午前中に授業はすんでしまう。慈念は校舎を出ると、すぐ衣笠山に向って帰ってくる。一時に帰りつく。昼食。二時から作務である。作務は掃除だ。時には薪割りもある。庭の草取りもあるし、雪隠に糞がたまれば汲み取りもしなければならない。作務は日没と共にすむ。六時に庫裡に戻る。食事の用意。夜食が終るのは八時だ。それから、経文の筆記であった。就寝十時。
慈念の生活をみていると、禅寺の修行というものはつらいものだな、と里子は思わざるを得ない。普通の家の子供

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com